



東洋と西洋の見事な融合 「バルト海の国から」

タリン室内管弦楽団日本公演

小林信一

(財)合唱音楽振興会 常務理事

「バルト海の国から」というタイトルのタリン室内管弦楽団(エリ・クラス指揮)の演奏会を、東京オペラシティ・タケミツメモリアルホールと河口湖円形ホールの2夜聴くことができた。

幕開けは今年70歳を迎えるペルトの作品「東洋と西洋」。自国の偉大な作曲家に対する愛に満ちた素晴らしい演奏。ペルトは作曲スタイルがティンティナブリ様式(鈴が鳴るような和声づくり)で静謐な音楽と思っていたのだが、この作品においてはそれがもっとエモーショナルに弦楽器がヨーロッパの大河を思わせるようにテュティで鳴り響く。

次のシベリウスは「恋人」と題する美しい作品。愛するものたちの普遍的な様を3つの章に描いている。実に美しく特に一曲目の「恋人」においての多分フィンランドの民謡からの旋律だと思うのだがこのフレッシュなアンサンブルの面々が奏でる演奏にピタリとはまっていて申し分ないものであった。

三曲目のショスタコーヴィチはソリストにバルト三国ラトビア出身のまだ21才という若さのピアニスト、ウェスタード・シムクスを迎えてトランペットのソロも加わり、公演前半の音楽的盛り上がりを見せてくれた。

このピアニスト、はじめの高音のアタックの切れの良さとその粒のそらった音色の輝きは、将来の大器を十分に予想される。ショスタコーヴィチは没後30年ということもあり、オーケストラ作品も演奏される機会が増えている。やはりこの作曲家の音楽が今も光彩をはなっているということだろう。20代後半で作曲されたこの作品は、総じて主旋律はロシアを感じるものの全体明るさに満ちており、このピアニストの柔軟な音楽作りがこの作品のそういったところをよく表現していた。鳴りやまぬ拍手に応じてピアノのソロを2曲弾いて聴衆に応じていたが、いずれも小品で次回ぜひ彼のソロピアノを聴きたいと思ったのは私だけだろうか。その時はもちろんロシアや北欧の作

品は当然として、ラテン系のファリャとかグラナドスなど生きのいいリズムを弾くところを聴いてみたい。強い光の陰影をこのピアニストに感じる。衝撃的な日本デビューとっていいだろう。

東京公演では休憩を挟んで後半、松下功氏の能管のソロを伴う作品が演奏されたが、これは赤尾三千子氏の繊細で鋭角的な表現に流動的な弦が重なりダイナミックな音楽を作りだしていた。作品がそのように書かれていることは間違いないのだが、歌うところは思い切り歌うこの弦のアンサンブルの表現力が作品を強く支えていた。河口湖会場ではエストニアの作曲家ペーテル・ヴァヒの、やはりこれも邦楽器、篠笛をソロにしての作品。鯉沼廣行氏の醸す音は弦楽器のアンサンブルに見事にけ込み、作曲家の東洋と西洋の融合というテーマを具現化していた。ヴァヒの次回作は東京混声合唱団のために、やはり芭蕉の俳句をテーマに作品をすでに完成させているのだが、彼のこの作品を聴く限り東洋への深い憧憬のようなものがあるのを感じた。次回作を聴くことによりそれは確かめられるだろう。

シュニトケの、プリペアド・ピアノ奏法を含んだ2つのヴァイオリンをソリストにした作品もめったに聴けない作品で秀逸。惜しめないアンコールに応じて指揮者のエリ・クラス氏はうれしいプレゼントを2曲、まずシベリウスの「哀しみのワルツ」そしてヨハン・シュトラウスの「ピチカート・ポルカ」。それぞれ聴衆と一体となった見事なフィナーレであった。(2005. 9.)

コンサート “現代ラトビアの音楽”

9月23日

武蔵野市民文化会館小ホール

①室内楽の部 午後2時

ガルータ「ルークシャナ “祈り”」

ヴァイオリン：野村英利

ピアノ：藤城敬子

サルガ「人の苦しみの道」

ピアノ：甲斐万喜子

サルガ「永遠の対話」

サクソフォーン：河西麻希

ピアノ：甲斐万喜子

ヴァスクス「鳥たちのいる風景」他

フルート：安藤史子

ガルータ「ピアノ三重奏曲変ロ短調」

ヴァイオリン：野村英利

チェロ：任晃娥

ピアノ：藤城敬子

②オルガンの部 午後7時

ヤルマクス「ブネータス」

～オルガンのための組曲～(全曲版世界初演)

パイプオルガン：浅井美紀

カルルソンス「ソナタ」他

パイプオルガン：濹澤久美

◇

この演奏会は当協会会員・菊地康則氏が主宰する日本ガルータ協会(ゼメネ音楽企画の主催で開催された。来日したラトビア音楽アカデミーのユリス・カルルソンス院長(作曲家)が次のメッセージを贈った。

一人の人物に、これほどのことができるでしょうか！ お互いを理解し合うということは、どれほど貴重なことでしょうか！ この不安な世界において、諸国民の友情がいかに必要であることでしょうか！

2年前、菊地康郎さんの驚くべき組織力と音楽への献身的な愛により、著名なラトビアの作曲家ルーツィヤ・ガルータのカンタータ“主よ、あなたの大地は燃えている！”が東京で演奏されました。この演奏会の反響は、日本との政治的・文化的な関わりを必要とするラトビア政府にも伝わりました。

そしてつながりは一層深くなりました。本日、私たちは東京における二つのラトビア音楽コンサート～オルガン音楽と室内楽～に、立ち会います。

菊地さんのラトビア音楽への関心は、20世紀初頭からの一世紀を俯瞰する二つのプログラムへと発展しました。今回演奏される音楽には、それぞれ大きな違いがあります。バルト海地域の作曲者により創造された音楽は激し過ぎる表現もありますが、瞑想的でロマンチックな傾向を備えてもいます。自然の感覚、メランコリー、強烈なイメージが劇的な対比を見せる、色彩の交錯があります。

音楽作品の創造は非常に複雑な、それと同時に根気を要するプロセスです。しかし、作品は演奏されることによって世に知られ、多くの聴衆の耳に届くこととなります。それゆえ私は特別な感謝の気持ちを、コンサートの出演者のみなさんにお伝えしたいと思います。

私たちラトビア人は北欧の民族です。しかし私たちは光、魂と愛の調和への永遠も憧れを通して、日本の皆さまとつながります。私は、菊地さんのラトビア文化に対する友好、献身、そして驚嘆すべき愛情に対し、まことの感謝の気持ちを表明する名譽に浴したいと思います。

伝統と実力を

桜友女声合唱団
定期演奏会

10月2日(紀尾

(すみだトリフォ

二つの伝統ある美

演奏会を聴きまし

メンバーです。村

桜楓は日本女子大

成されているだけ

の信頼が厚く、チ

が毎回名演奏に

もう一つの共通点

しい指揮者との出

です(桜友は大谷

下耕氏・藤井宏樹

のポリシーは違っ

から向き合った意

桜友女声合唱団

は、「ラウタヴァ

ロルカの詩によ

「相馬孝洋/汀」

が多いことで有名

の曲でご多分に漏

ました。言葉もス

ました。このステ

し、若々しい声か

きも増したよう

をかけた難曲で全

楽と言える作品。

意味を持たない、

う「記憶の残滓の

ので、聴いた後に

ました。この曲は

聴きましたが、そ

まれた分、より深

ました。文字通り

桜楓合唱団は

ゼッティの四つの

囀作「西村朗/《

が強く印象に残り

情味あふれる美し

熟した女声合唱と

ンブルを紡ぎだし

らも現役有志が加

幅が広がったよう

委囀作「青猫の丑

アマチュアには荷

ないかと少し心配

は大成功でした。

揮)は歌う皆さん

して生硬い伸びの

いましたが、今回

をもって歌えたよ

る素晴らしい演奏

この曲の良さを改

両団のメンバー

唱でご一緒した

全く変わらない若々

した。(大澤寛之

ークラブOB)